

# 保育相談を受ける保育者の専門性について（3）

— 相談に対する保育者の応答傾向を保護者の立場から考察して —

## Professionalism of Child Care Workers during Child Care Counseling (3)

— Examining advising tendencies of childcare providers from the parents' viewpoints —

次世代教育学部こども発達学科

中道 美鶴

NAKAMICHI, Mitsuru

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

**キーワード：**保育相談，保育者の専門性，保護者支援，応答傾向

**要旨：**本研究レポートは，保育現場で保育相談を受ける保育者には，どのような専門性が必要かを探っていくため，保育相談において保護者はどのような保育者の応答を求めているのかを調査した。そして，前回行った「保育者の応答傾向」についてのアンケート調査結果と，今回の「保護者が求める応答」の調査結果とを比較した。

その結果，保護者が求める保育者の応答は，「受容・共感型」がやや高いものの，「支持・同情・激励型」，「一般化・情報提供型」，「質問・先送り型」，「提案・助言型」に大きな差がなかった。そして，保育者の応答傾向との比較では，「一般化・情報提供型」と「提案・助言型」の平均値が，保育者の応答傾向より保護者の期待の方が高かった。保護者が保育者へ相談する際，保育者に期待しているのは，カウンセリング的対応と同時に，コンサルテーション的な対応ではないかと考えられる。

しかし，保護者の求めに応じて一方的に助言・援助していると，保護者は受け身になり，依存的になって，保護者自身が力を付けていくことは望めないということを肝に銘じておく必要がある。保護者が求める応答を踏まえ，本当に必要な保育相談はどのようなものかについて探っていく必要があるし，それが真の保育者の専門性であると考えられる。

**Keywords：**child care counseling, professionalism of child care workers, parental support, case examination, tendency of response

### I. はじめに

保育相談が幼稚園・保育所の役割であると幼稚園教育要領や保育所保育指針で位置付けられている。前回，保育者に対して行った子育て支援に関するアンケート調査（2013）の中で，「子育て支援を困難にしている要因」を記述式で質問したところ，「経験，知識不足で，保護者の話を深いところまで聞くことができない。」「保護者の悩みが多岐にわたっているため，適切に助言できていない。」という現場の悩みが記述された。子育て支援に携わる保育の専門家らは，研修の機会も時間も少ない中，我流で行っているという実情がある。

そこで，本研究は，保育現場で保育相談を受ける保育者には，どのような専門性が必要かを明らかにするために，様々な角度から保育者の実態を探ることを目的として取り組んでいる。

前々稿の「保育相談を受ける保育者の専門性について－相談事例を保護者サイドから考察することで－」では，相談事例から保育者の専門性について考察した。保育者が保護者と日常的に直接かかわる場で保護者からの相談にどのように応答するかによって，保護者の不安解消や園に対する信頼感が左右されることに注目した。

そして，前稿の「保育相談を受ける保育者の専門性について（2）－保護者の相談に対する応答傾向－」

では、保護者からの相談に対して保育者がどのように応答するかをアンケートにより調査し、保育者の応答傾向を明らかにすることで保育相談を受ける保育者の専門性について考察した。

その結果を踏まえ、本稿では、保護者へのアンケートによる「保護者が保育者へ相談した際に、期待する保育者の応答」の調査結果を、前回のアンケート調査(2013)から明らかになった「相談に対する保育者の応答傾向」と比較することによって、保護者サイドから考察することを試みた。

## II. 研究方法

### 1) 調査対象

O県内公立幼稚園4園に子どもを通わせている保護者410名の内、アンケートに回答のあった306名(回収率74.6%)

### 2) 調査時期

平成26年10月

### 3) 調査方法

O県内公立幼稚園4園に対して口頭でアンケートの依頼をし、園児を通じて配布、1週間内に担任へ提出してもらって託送調査法で行った。

### 4) 調査内容

#### ①回答者の属性

年齢、就業等について選択法による回答を求めた。

#### ②同居の有無

園児の祖父母との同居について、選択法による回答を求めた。

#### ③子育てに関する悩み

悩みを相談する相手と、悩みの種類について選択法による回答を求めた。

#### ④園の保育者に対する相談

悩みを保育者に相談するか、そして、相談内容は何かについて選択法による回答を求めた。

#### ⑤保護者が期待する保育者の応答

「保護者が、『子どもの友達関係』について園の保育者に相談したとして、応答例のように答えてもらったら、相談してよかったと思えるか」という設問に対して、吉田(2011)による「生活事例からはじめる相談援助」を参考に作成した【保護者が期待する保育者の応答例】を15項目示し、「はい」、「どちらかといえば

“はい”], 「どちらかといえば“いいえ”], 「いいえ」の4件法で回答を求めた。

## 5) 調査後の処理

### ①保護者が期待する応答例15項目の分類

15の応答例は前回と同様に、吉田(2011)による「生活事例からはじめる相談援助」(1)ロールプレイで学ぶ子育て相談(p131-132)を参考に以下の5種に分類し(表1)、5種類の平均値から考察することとした。

表1 相談に対する応答傾向の5つの型

① 受容・共感型
2 「大変な思いをしておられるのですね」と労われる
6 「お子さんが孤立しそうで心配しておられるのですね」と共感される
12 「どうしたらいいか分からなくて悩んでおられるのですね」と受容される
② 支持・同情・激励型
8 「気苦労が多くて大変ですね」と同情の言葉を掛けられる
14 「そんなに心配されなくても大丈夫ですよ」と励まされる
15 「大変だけど頑張りましょう」と激励される
③ 一般化・情報提供型
1 「子どもはけんかするものですよ」一般的だと言われる
4 「そういうことは子どもならよくあります」と情報提供される
10 「他の親御さんも子どもことで苦労して育てていますよ」と一般化される
④ 質問・先送り型
3 「原因は何だったのですか」と、詳細を質問される
9 「お母さん同士も気まずいのですか」と、その他の状況を聞かれる
13 「もう少し様子を見ていきましょう」とすぐには助言されない
⑤ 提案・助言型
5 「仲直りの方法を教えられたらどうでしょうか」と提案される
11 「こんな時はスキンシップが効果的ですよ」と助言される
7 「時が解決してくれます。気にしないようにしましょう」と助言される

## III. 結果

### 1) 被調査者の属性

被調査者の属性を以下(表2)に示す。

表2 被調査者の属性

<年 齢>	20歳代以下	28名
	30歳代	198名
	40歳代	78名
	50歳以上	0名
	記述なし	2名
<子どもの人数>	被調査者の平均	2.44人
<就 業>	フルタイム	32名
	パート	53名
	内職	11名
	主婦	197名
	その他	11名
	記述なし	2名
<同居の有無>	有	64名
	無	240名
	記述なし	2名

## 2) 被調査者が悩みを相談する相手と、悩みの種類

被調査者が悩みを相談する相手と、悩みの種類について以下(表3)に示す。

表3 被調査者が悩みを相談する相手と相談内容(複数回答)

<相談相手>	配偶者	230名
	その他の家族	194名
	友達	80名
	保育者	47名
	その他	13名
<相談内容>	子どものこと	186名
	しつけ方	154名
	習いごと	28名
	友達関係	111名
	その他	11名
<保育者への相談>	相談した	150名
	相談してない	154名
	記述なし	2名
<保育者への相談内容>	子どものこと	110名
	しつけ方	12名
	習いごと	2名
	友達関係	70名
	保護者自身の人間関係	4名
	その他	3名

## 3) 保護者の保育者への相談の実際

### ①同居の有無と保育者への相談

「保育者へ相談したことがあるか」の質問に対して、「ある」と答えた人が150人、「ない」と答えた人が154人であった。この結果が、同居の有無によって影響を受けているかを調べるためカイ2乗検定を行った(表4)。その結果、 $\chi^2(1) = 2.46$ ,  $p > 0.05$ となり、保護者がその父母と同居しているかいないかによって保育者に相談するかどうかは影響されていないことが分かった。つまり、同居している・同居していないに關

係なく、保育者に相談していることになる。

実際に(表3)から、多くの保護者が配偶者やその他の家族に悩みを相談しており、保育者にも相談している。家族に相談するが、保育者へも相談するということは担任との人間関係ができていているということだけでなく、保育の専門家であることへの期待もあるのではないかと考える。

表4 同居の有無と保育者への相談との関係

	相談した	相談してない	
同居あり	26	38	64
同居なし	124	116	240
	150	154	304
	$\chi^2$	確立(p)	
$\chi^2$ 検定	2.46	0.12	

### ②保育者への相談の実態

調査の結果、保育者に相談をしたことがあると答えた保護者は304名中150名だった。アンケートに回答した保護者の約半数が保育者に相談していることになる。

相談内容は、「子ども自身のこと」が110名、「子どもの友達関係」が70名で、「しつけ方」、「習いごと」、「保護者自身の人間関係」は少なかった。これらの相談内容の詳細については今回調査していないが、保護者の約半数から相談を受けているという結果を重視し、保育者側から考えるために、『1. はじめに』でも記述した2013年の保育者へのアンケート結果を引用する。その中で、「子育て支援を困難にしている要因」についての質問に、「経験、知識不足で、保護者の話を深いところまで聞くことができない」、「保護者の悩みが多岐にわたっているため、適切に助言できていない」と答えている。保護者からの相談に対応しながらもその難しさを実感している様子が窺える。また、「保護者を精神的に支えるのが難しい」という回答からは、保護者の心配や不安、動揺等が語られ、かなり深刻であることも想像できる。

前稿でも述べたように、「保育者としては専門家であるが、『子育て支援に関する様々な学習の必要性、特にカウンセリングの知識や技術取得の重要性が掲げられているが、子育て支援の現場にいる保育者たちには、これが十分行き渡っているとは言えない状況がある。』と石川ら(2005)が言うように、多くの保育者は心理相談の理論や技術を十分身につけているとは言えない。」中、手探りで対応していることから、保育者にとっても保護者にとっても相談がよい結果につな

がるかどうかは綱渡りの状態であるとも言える。

また、「保護者自身の人間関係」に関して4名の保護者が保育者に相談しているということも看過できない。相談の内容や深刻さによっては保育者が相談を受けることで事態が悪化したり、園が保護者の混乱に巻き込まれたりする可能性も否定できない。どのような相談に対してもだが、保育者が対応するか管理職が対応する必要があるのか、専門機関へのオファーを考えた方がよいのか、適切な判断が求められる。この判断に際しても専門的知識が必要となる。

しかし、牧野（2012）が、「保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方」を主題にした調査研究の中で、「保育者の専門性を生かして、日々の保育の中で保護者支援を続けているが、保育者の保護者に対する支援業務については、まだ十分な整理や体系化がなされていない現状であり、保護者支援をどのように受け止めて、どのように行えばよいのかという方法論について、いまだ議論の途上にあると言っていい」と述べているように、保育相談の指針となる基準等が体系化されていない中、保育経験から培った発達観や、幼児観、育児観など、保育者の見方・考え方に頼って保育相談の業務を行っていることは否めない。今後の研究や早急な体系化が待たれる。

#### 4) 保護者が期待する保育者の応答

##### ①15項目の平均値

保護者が、「『子どもの友達関係』について園の保育者に相談したとして、応答例のように答えてもらったら、相談してよかったと思えるか」という質問に対する回答の結果である。

「はい」を4ポイント、「どちらかといえば“はい”」を3ポイント、「どちらかといえば“いいえ”」を2ポイント、「いいえ」を1ポイントとし、応答例の通りに応答されることへの期待が高いほど数字が高くなるようにした。

以下は、15項目の平均値を示している。

表5 保育者の応答傾向調査の項目別平均値

項目番号	項目	平均値
1	安心	3.01
2	労う	3.37
3	原因	2.98
4	情報	3.04
5	提案	2.64
6	共感	2.93
7	気に過	2.07
8	同情	1.95
9	質問	2.30
10	一般化	2.47
11	愛情を	2.92
12	受容	2.95
13	様子	2.47
14	大丈夫	2.98
15	激励	2.42

項目8<「気苦労が多くて大変ですね」と同情の言葉を掛けられる>の平均値が1.95、項目7<「時が解決してくれます。気にしないようにしましょう」と助言される>の平均値が2.07と低いものの、それ以外の1～15の項目の平均値には大きな差がない。

この結果を、保護者が期待する応答例5分類の平均値によって考察する。

##### ②保護者が期待する応答の分類別平均値

保護者が期待する保育者の応答の、分類別平均値(表6)を次に示す。

表6 相談に対する応答傾向の5つの型の分類別平均値

分類	項目番号	項目	平均値
① 受容・共感型	2	労う	3.08
	6	共感	
	12	受容	
② 支持・同情・激励型	8	同情	2.45
	14	大丈夫	
	15	激励	
③ 一般化・情報提供型	1	安心	2.83
	4	情報	
	10	一般化	
④ 質問・先送り型	3	原因	2.58
	9	質問	
	13	様子を	
⑤ 提案・助言型	5	提案	2.44
	7	気に過	
	11	愛情を	

表6の分類別平均値の結果について考察する。



分類①<受容・共感型>の平均値が3.08と最も高い。「保育者は、保護者の状況やその意向を理解して受容し、自主的に問題解決ができるように援助する。問題解決していく力は、保護者自身が持っている。成長していく力を引き出すために、受容・共感が有効である」と牧野（2012）が指摘しているが、保護者自身もそのことを望んでいる。「保護者は、話を受け止め、自分の思いや感じ方を理解してくれる保育者の姿勢」を求めていると思われる。

これは、牧野（2012）が『保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方』の中で述べている、保護者と関わる時の基本的な姿勢と共通している。牧野（2012）は、「基本的な姿勢として、どんな場面でも受容的、共感的な態度で、保護者の話を傾聴することが重要になる。保育者は、……（略）……保護者の思いを十分受け止めることが大切である。『保護者の話を受け止めよう、保護者の言っていることを理解しよう』とする保育者の姿勢から、保護者の支援を行う上で最も大切な相互の信頼関係が形成され……（略）……」と述べ、相槌や頷き等の具体的な受け止め方を示している。このことを保護者が最も求めている。

次に分類③<一般化・情報提供型>の平均値が2.83と高い。筆者が定期的に行っている子育て講座の中でも、保護者は子育ての仕方についての助言を求めることが多い。また、他の子どもがどのような様子か気にしている。中平ら（2013）が、『保育所保育における保育士の資質の問題点と課題』の中で、「保育士は保護者の悩みを丁寧に聞き、不安や悩みを取り除くように最善の対応をしなければならない」と述べているように、保護者が抱える子育ての不安や悩みを丁寧に聞き、具体的な子どもへの関わり方や言葉の掛け方等について助言することで、身近な問題を解決していく必要があるし、保護者もそれを求めている。保育所保育指針でも「専門性を生かして子育て支援を行うこと」と明記されているように、保護者へのコンサルテーションが保護者支援の基本的な考え方だと考える。

佐々木ら（2013）は、『「ほめ方」「叱り方」「しつけ方」に悩んだら読む本』で、子育てがうまくいかないときにどうすればよいのか、基本となる子育ての考え方や、効果的な方法を紹介している。そして、「本質を分かることは大事だが、日々の子育てにすぐ使える『ノウハウ』もあった方が心強い（佐々木ら、2013）」と子育てのノウハウやヒントを多く紹介している。このような子育てに関する本が多く出版されるのも、子

育て中の読者が必要としているからではないかと考える。

分類②<支持・同情・激励型>の平均値が2.45、④<質問・先送り型>の平均値が2.58、⑤<提案・助言型>の平均値が2.44と大差がない。このことから、保護者が保育者へ相談する際、保育者に期待していることは、カウンセリング的対応と同時に、コンサルテーション的な対応ではないかと考えられる。

鏡ら（2005）も「保育相談とは、家庭や保育所における子どもの保育をよりよくするための援助であり、保育の一貫として保育相談という業務が行われることはあっても、それは社会福祉士や臨床心理士の行うソーシャルワークやカウンセリングとは異なっていると考えられる」と述べている。保護者が求める応答、そして、本当に必要な保育相談はどのようなものかについて、今後探っていききたい。それが真の保育者の専門性であろうと思う。

### ③保育者の応答傾向の平均値との比較

前項では保護者が期待する応答の分類別平均値から考察した。保護者は、<受容・共感型><一般化・情報提供型>の応答を期待しているが、他の<支持・同情・激励型><質問・先送り型><提案・助言型>とも大きな差はない。

ここでは分類別平均値（表6）を、昨年度調査した保育者の応答傾向調査の分類別平均値と比較する。その結果を表7に示す。

表7 保護者が期待する保育者の応答と、保育者の応答傾向の分類別平均値

分類	項目		平均値	
	項目番号	項目	保育者	保護者
① 受容・共感型	2	労 う	3.09	3.08
	6	共 感		
	12	受 容		
② 支持・同情・激励型	8	同 情	2.26	2.45
	14	大丈夫		
	15	激 励		
③ 一般化・情報提供型	1	安 心	2.13	2.83
	4	情 報		
	10	一般化		
④ 質問・先送り型	3	原 因	3.00	2.58
	9	質 問		
	13	様子を		
⑤ 提案・助言型	5	提 案	1.93	2.44
	7	気に過		
	11	愛情を		

分類①<受容・共感型>、②<支持・同情・激励型>の平均値は、保育者の応答傾向と保護者が期待する応答がほぼ一致した。「受容・共感型の応答の場合、保護者が気持ちを分かってもらえたと感じ、保護者自身が自分で心の中を整理したり、解決方法を自ら見つけたりできるようになる（吉田，2011）。」保育者は保護者に対して受容・共感的な応答を心掛けているし、保護者もそれを期待している。ただ、質問項目④<同情>の平均値は保護者の期待は1.95であり、保育者の応答傾向も1.69と低い。「同情は保護者をもじめな気持ちにしてしまう」と吉田（2011）が述べているが、保護者は同情的な応答を求めているし、保育者も同情的な応答はしないことが多いという結果だった。

③<一般化・情報提供型>、⑤<提案・助言型>の平均値は、保育者の応答傾向より保護者の期待の方が高い。吉田（2011）によると、「一般化傾向の応答では、保護者が個人として大切にされていないという気持ちになるし、提案型の応答は、押しつけられたと感じさせてしまう」ことがあるものの、前項で述べたように保護者は情報や助言を求めている。ただ、保護者の求めに応じて情報提供や助言をすることが果たして問題解決につながるのかを考える必要がある。「保護者自身が自分で心の中を整理したり、解決方法を自ら見つけたりできるようになる（吉田，2011）。」ためには、保育者から保護者へ一方向の助言をするより、一緒に考えたり、保護者がしっかり語ったりすることが大切だと考える。

④<質問・先送り型>の平均値は、保護者の期待より保育者の応答傾向の方が高い。保育者は、保護者にあれこれ質問したり、「様子を見ましょう」と先送りしたりすることが多いが、保護者はそれをそれほど求めているわけではないという結果であった。

#### IV. 総合考察

今回のアンケート調査を通して、保護者が日常の保育相談の中で保育者にどのような応答を求めているのか分かった。

保護者が期待する保育者の応答の種類別平均値の中でも、<受容・共感型>の平均値が最も高かったことから、「受け止めてもらいたい、理解してもらいたい」と保護者が期待していることが分かる。「保護者への支援を行う上で最も大切な相互の信頼関係が形成される」と牧野（2012）が述べる保育者の基本的な応答を保護者も求めていると言える。

ただ、保護者の気持ちを<受容・共感>することはたいへん難しい。河合ら（2010）は共著「臨床とことば」の中で「他者の理解においては、同じ思いになることではなく、じぶんにはとても了解しがたいその思いを、否定するのではなくそれでも了解しようとおもうこと、つまり、その分かるとうとする姿勢にこそ他者はときに応えるということである」と述べている。相談者と来談者の、気持ちの行き交いの機微、受容されたという「来談者の感触が大切であり、『その気持ち、分かります』などという言葉（河合ら，2010）」だけで来談者が受容してもらったと感じるような安易なものではない。今後研究・研修を進めていく必要のある大きな課題である。

牧野（2012）は、「一人一人の保護者が、『一人の価値ある人間として対応してもらいたい』『あるがままの気持ちを受け止めてもらいたい』『自分の気持ちや言動に対して保護者の立場に立った対応してもらいたい』『一方的な価値観に縛られないで自分のことは自分で決めたい』という深い思いをもっていることを忘れてはいけない」と述べている。正に「ケースワークの原則」を著したバイスティックの7原則である。保護者の求めに応じて一方的に助言・援助していると、保護者は受け身になり、依存的になって、保護者自身が力を付けていくことは望めないということを肝に銘じておく必要がある。

また、「多くの保育者は『保護者はモンスターなどではない。クレームという形をとりながら保育者に助けを求めている』というように受け止めている」と鑑ら（2005）が述べている。保護者は保育の専門家である保育者に想像以上に求めているということ、保育者は理解しているというのである。保育者の使命感に裏打ちされた保護者への対応に安心感を抱くが、それだけに頼っていては、鑑ら（2005）の言う、「保育士らの日常業務を概観すると、従来の保育業務に加え……(略)……様々な悩みを抱える家族への対応により、負担が集中している」という状況にますます拍車をかけることになってしまう。保育者は、保護者の求めに対応しながらも、巻き込まれないように基本に沿って対応し、保護者とのよりよい関係づくり、「その人の強みに着目するストレングス視点（吉田，2011）」を大切に対応していくこと。そして、「その人の目標や生き方をその人自身が決め、自分らしく生きられるように支援者は脇役となり……（吉田，2011）」支えていくことが重要ではないかと思う。

## 引用・参考文献

- 石川陽子・井上清子・会沢信彦 (2005), 「子育て支援とカウンセリング (1) - 保育者のカウンセリングに対するニーズを中心に」, 文教大学教育学部『教育学部紀要』, 39, p51-62
- 石黒万里子 (2009), 「保育者の専門性に関する一考察 - 保育者に固有の「知識」と「判断」-」, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 41, p1-6
- 鑑さやか・千葉千恵美 (2005), 「社会福祉実践における保育士の役割と課題～子育て支援に関する相談援助内容の多様化から～」, 東北文化学園大学, Journal of Health & Social Services, 4, p35-36
- 梶浦真由美・鍛冶紀美子・清水貴子 (2006), 「保育者養成校における子育て支援に関する研究 (1) - 学生のレポート分析を通して -」, 北海道文教大学研究紀要, 30, p45-54
- 柏女霊峰・有村大士・橋本真紀・伊藤嘉余子・西村真実・小清水奈央・山川美恵子・高山静子・天野珠路 (2011), 「児童福祉施設における保育士の保育相談支援技術の体系化に関する研究 (1) - 保育所保育士の技術の把握と施設保育士の保護者支援 -」, 日本こども家庭総合研究所紀要, 46, p31-61
- 柏女霊峰・有村大士・永野咲・橋本真紀・伊藤嘉余子・西村真実・水枝谷奈央・山川美恵子・高山静子・三浦淳子・天野珠路 (2012), 「児童福祉施設における保育士の保育相談支援技術の体系化に関する研究 (2) - 保育所保育士と施設保育士の保育相談支援技術の抽出と類型化を中心に -」, 日本こども家庭総合研究所紀要, 47, p63-85
- 柏女霊峰・有村大士・永野咲・橋本真紀・伊藤嘉余子・西村真実・鎮朋子・水枝谷奈央・山川美恵子・高山静子・三浦淳子 (2013), 「児童福祉施設における保育士の保育相談支援技術の体系化に関する研究 (3) - 子ども家庭福祉分野の援助技術における保育相談支援の位置づけと体系化をめざして -」, 日本こども家庭総合研究所紀要, 48, p1-37
- 香曾我部 琢 (2011), 「保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題」, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59, p53-68
- 河合隼雄・鷺田清一 (2010) 「臨床とことば」, 朝日新聞出版
- 牧野桂一 (2012), 「保育現場における子育て相談と保護者支援のあり方」, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 7, p179-191
- 文部省 (1999), 「幼稚園教育要領解説」, フレーベル館
- 文部科学省 (2008), 資料「教育課程の基準の改訂の経過」, 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, p245
- 中平絢子・馬場訓子・高橋敏之 (2013), 「保育所保育における保育士の資質の問題点と課題」, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 3号別冊, p58
- 中道美鶴 (2005), 「“子育て講座”を実施して - 母親の育児不安と幼稚園における支援 -」, Bulletin of Shinri-Kyoiku Counseling Clinic at Okayama University 「心理・教育臨床の実践研究」, 4, p69-76
- 斎藤幸子・須永進・青木知史・山屋春恵 (2012), 「保護者のニーズとその対応 - 保育所と幼稚園における調査結果の比較」, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 47, p329-336
- 佐々木正美・若松亜紀 (2013), 「『ほめ方』『叱り方』『しつけ方』に悩んだら読む本」, PHP研究所
- 吉田眞理 (2011), 「生活事例からはじめる相談援助」, 青踏社